
彼女たちの最期の姿が、今でも脳裏に焼き付いて離れない。

合わせていた手のひらを開き、まぶたを上げれば。にじんだ視界に、自分が泣いていたことに気づく。

「ちゃんと泣けたみたいですね」
「このひとにはやはり敵わない。」

「……はい」

正直に応えた。

それから、

「手回し、ありがとうございます」
改めて礼を述べる。

百合ヶ丘女学院、英霊墓地。

その一角に彼女たちは埋葬されている。

「お礼を言われるほどのことはしてませんよ」

それに、

「貴方が直接お願いしてたとしても、許可が下りないことなんて、ないと思いますけど」

「……あまり、騒がれたくなかったので」

その応えに、棗は「あゝ」と納得する。

初等部時代、神童とまで呼ばれた才能。現在はまだ一般校の中学生という身分ながら、御台場への進学も決まり、その容姿と活躍からすでにメディアの注目を浴びている存在。

それにここには、

「いますからねえ」

騒ぐひと。

その言葉に頷いてしまつてよいのか。

少し困る。

ただ、この時間を静謐なものにしておきたかったのは確かだった。

「私もお邪魔なら退散しますけど？」

「いえ。先生には……立ち会っていてほしいんです」

「そうですか」

そっけない返事。いまはそれくらいがちょうどいい。再び墓前に向き合い、そこに刻まれた名を指でなぞった。

——山下絢子。

「私の、親友でした」

CHARMこそ携行していたが訓練用の第1世代機。簡単な行軍演習だった。

今でこそ「ノインヴェルト世代」などと呼称されているが、その頃はまだそういった呼び名もなく。ただこのままの戦い方では損耗が大きすぎる。そういった中で個々の技能だけでなく、集団戦術での戦闘スタイルが注目され始めた時期だった。

とはいえ、まだ初等部だ。実戦に赴くなどまだまだ遠く先の話。

あったとしても上級生の付き添いの下。後方待機で討ち漏らしたスモール級を相手に協力して一体ずつ倒していく。あくまで訓練。

その日の行軍演習も班ごとに分かれ、目的の地点まで進軍し、帰ってくる。

「チームワークを学ぶ」といえば聞こえはいいが。要するに息抜きがてらの遠足。

子供たちへのちよつとしたご褒美。

そのはずだった。

事前の索敵では周囲に敵影は観測されず、普段は帯同する上級生たちもいない。

すき抜けるような青空だったのを覚えている。

お小言のない遠出に浮かれる者も多く、どこからか歌声も聞こえてきていた。

隣を歩く彼女も普段に増して明るい笑顔で私の手を握って歩いていた。

お弁当のサンドイッチが楽しみだとか、そんなたわいのないことを無邪気に語りかけてくる姿に微笑みを返しつつ。

隊列の先頭を任されたからには、気を抜くわけには行かない。

常在戦場。

周囲には常に気を張り、いつ何が起きてもおかしくないよう神経は尖らせていた。

異変を感じたのは帰り道のことだった。

少女たちの歩みは往路ほど元気はなく。

遊び疲れてあとは家に帰るだけ。

そんな彼女たちに制止をかけたのは、ガーデンまであと半分の距離にあった山道だった。

不満の声を「静かに」と押し止め、周囲の気配を探る。

「……違う」

何がとは言えない。しかし昼間通ったときと何かが違うて感じられた。

CHARMにマギを込めると、空いた手を彼女が強く握りしめてきた。冷たく震えていたのを覚えている。勇気づけるように握り返した。

そうしながらも呼吸と一緒に五感を広げ、空間を取り込

むように神経を研ぎ澄ます。

吸って吐き。

——っ！

捕捉と同時に草影が大きく揺れた。

起動しておいて正解だった。

鎌のように鋭い爪を刀身で受け止める。

スモール級ヒュージ。

初めて見たわけではない。

上級生について向かった戦場では単独でも何度か交えたこともある。

ただそれも、どこまでも訓練の一環。

今の状況は、ちがう。

狙われている！

襲われている！

「救援要請を！」

左手にしがみつく彼女に強く言い放った。

「後ろに下がって！ 助けを呼んで！」

震えた手。このままで戦うのは危険すぎる。

肩を押し、無理矢理引きはがした。

「CHARMを機動っ！」

敵はこの一体とは限らない。

まだ周辺に潜んでいる可能性は高い。

ただ少なくともここまでの道中に、さっき感じた違和感
はなかった。

居るとしたらこの先。

ならば、選択肢は後方への撤退。

「殿は私が務めます！」

——私が、皆を守らなければ。

自身の判断の甘さに気づくのにそう時間はかからな
かった。

追いつがつてくるスモール級を何とか撃退した直後。

「避けてっ！」

木々の合間を縫い、隊列の真ん中をめがけ、新たなスモ
ール級が飛び込んできた。

とっさに受け止めたのがあだとなり、隊列から一人がは
じき出される。

「——っ！」

最高尾から地面を蹴り飛ばす勢いで追いつき、背後から
袈裟掛けに両断する。

「あ、ありが」

「早く隊列につ！」

「——助けてっ！」

振り返った先。

先の突撃で乱れた隊列の中にはすでに新たなスモール
級が3体！？

「止まるな！ 回り込まれる！」

声は届いているのかいないのか。

ギリと歯噛みする。

「隊列に！」

助けた少女にも再び声をかけ、

「……え？」

先ほどまでいたはずの少女がいない。

否。顔が、ない。

代わりにあったのは、初等部の制服を着た。

首から先が。

見下ろすと、それは地面に転がっていた。

脳が理解を拒否している間に、胴体も崩れ落ちた。

「どういう……」

理由がすぐにきた

振り下ろされる爪を条件反射で受け止める。

6体目！？

出発前の索敵ではヒュージの気配もケイブの反応もなかった。

なのに！

「助けてっ！ お願いっ！ 早く助けて！」

隊列からは助けを求める声上がり続けている。

さっきの一撃は飛び込んだ勢いがあつたからこそ。

幼い膂力では今踏みとどまっているので精一杯。

「たすけて！」

助けたい。

助けにいかねばならない！

視界の端には最期に向けられた表情が、そのまま地面に転がっている。

その安堵の顔に、胸の奥から重く熱いものがこみ上げてくる。

どうして！

どうしてっ！？

相手の押し込みが強くなった瞬間を狙い、その勢いを利

用して後方へと大きく跳躍した。

空中で身体を捻り、振り向きざまのなぎ払い。

狙うは隊列内に入り込んだ、

間に、合えっ！

頭部を一太刀で落とす。

同時にその爪は、対峙していた隊員の左胸を深々と貫いていて。

その泣きそうな顔に。

こみ上げる感情を吐き出す余地もなく、右から左から悲

鳴が上がる。

「助けてっ！」

「助けて！！！」

頭が沸騰しそうだった。

でも、

……彼女は？

最初に引き離れた彼女の声だけが聞こえない。

心臓の鼓動が首筋を伝い眼球の奥まで紅く染めていく。

無事にいる。

大丈夫だ。

きっと。

あの判断は、間違っていない。

間違ってなんかない！

背後から上段に振り下ろした刃の向こうには、必死に助けを叫び続けていた喉を引き裂かれ、倒れていく少女。昼間は楽しげに歌を歌っていた子だった。

「——ダメっ！ いまCHARMを手放したらっ！」

武器を投げ出し隊列から飛び出した少女の背をヒュージの熱線が何本も貫いた。

焦げた肉の臭いが立ち上る。

その向こうでは、さっきまで対峙していた個体が別の少女の胴を突き刺している。

執拗に何度も何度も。そのたびに痙攣するように身体が跳ねる様子は……。

「——っ……！」

冷静さなんて、残ってない。

心臓から上った血が脳で沸々と煮えたぎっている。

無我夢中で剣を振るった。

受け止めるよりも避けた方が早い。

助けを呼ぶ声に応えて縦横無尽に駆け巡る。

それでも、間に合わない。

全然、間に合わない。

一度たりとも間に合わない！

私が、私が、守らないと！

守らないといけないのにっ！

そうやって最後の敵が動かなくなるまで。

止まることなく駆け続けた。

もう隊列なんて、欠片も残っていない。

残ったのは、あの子たちの最期の表情だけ。

安堵、泣き顔、絶望、苦しみ、痛み……。

……残ってない。

誰も。

私以外、誰もっ！

いまここに立って残っているのは。

……。

彼女は？

彼女は……どこ？

マギはもうからっぽだった。

停止した機体を杖にして、もと来た道を引き返す。

天真爛漫な少女だった。

笑顔の似合う少女だった。

たわいのないことで、すぐににこにこして。

自分とはまるきり正反対なのに。

いつも隣にいてくれて、微笑みを分けてくれていた。

——絢子。

彼女の遺体は、すぐ側の林の中で見つかった。

彼女が倒したであろうスモール級が2体。

そしてその手にはしっかりと通信機が握りしめられていて。

（わたしもちゃんと、できたよ）

そう言っているような満足げな表情で。

私が見た、彼女の最後の笑顔だった。

身体を支えていたCHARMの刀身が、砕けるようにして崩れ折れた。

——朝毎に懈怠なく死しておくべし。

「明日は我が身。そう言ってしまうえば聞こえはいいですけど」

ど」

そう前置き、

「傲慢ですね」

棗は言い切った。

「その手のひらだけで、一体どれだけの命を救えるとまだ信じてるんですか？」

「……似たようなことを柊様にも言われました」

それに嘆息される。

「同じですよ」

棗の声は依然冷たい。

「今ここにいる貴方は、遠く離れた地にいる誰かを救うことができませんか？」

「……それは。不可能です」

「同じです」

繰り返される。

「何人集まったところで、救える命には限りがあります」
それをいちいち背負い込んでなんていたら、先になんて進めません。

あのととき、ああしていれば。

もっと力があれば。

「そんなものは、もしも論より意味のないただの言い訳で

すよ」

「……手厳しいですね」

「別に割り切れと言ってるわけではありません」

折り合いを見つけ、けじめをつけなさい。

……折り合い。

「一生仕上ぐる事なり、ですか」

「停滞は後退と同じです」

思考もまた然り。

「貴方の弱さはこの半年で大分理解したつもりですけど」

「……私はまだ、弱いですか？」

「弱いですね」

でもまあ、それを鍛えるのが私の仕事ですし。

「少しはマシになったと思いますよ」

この場で泣けるくらいには。

そう言っただけは意地悪げに笑った。

……敵わない。このひとつには、本当に。

「さて日も傾いてきましたし。ちやつちやと本題に移りましょうか」

そのために私が居るんでしょう？

頭を掻く。

どこまで見透かされているのやら。

「墓前に手向けるのは、何も花だけとは限りませんからね」
そう言っただけ、腰の二刀を引き抜いた。

頷き、私も帯刀していたヨートウンシュベルトを構える。

彼女たちの最期の姿は、今でも脳裏に焼き付いて離れない。
い。

ああ言われたが、折り合いなんて付けられるはずもなく。

それが私の弱さ。

彼女たちのことを忘れることなど、許されようもない。

私の背負った業。

一生を賭けても償いきれない宿業。

それを傲慢と言うならば、貫き通すしかない。

自分の不器用さは自覚している。

ならば。

私は今生を、貴方たちの分まで戦い抜いて、最後まで生きてみせる。

それが私がいま求める強さ。

だから、見ていてください。

今の私を。

貴方たちが、少しでも安心して眠っていられるように。

立ち並ぶ墓前に銀の一闪が舞った。
